

今週の為替相場見通し (2017年9月4日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.27 ~ 110.67	110.24	108.00 ~ 112.00
ユーロ	(ドル)		1.1823 ~ 1.2070	1.1860	1.1700 ~ 1.2100
(1ユーロ=)	(円)		129.66 ~ 131.70	130.84	129.00 ~ 133.00
英ポンド	(ドル)		1.2852 ~ 1.2995	1.2941	1.2850 ~ 1.3100
(1英ポンド=)	(円)	*	140.02 ~ 143.01	142.76	141.00 ~ 144.00
豪ドル	(ドル)		0.7872 ~ 0.7997	0.7972	0.7700 ~ 0.8100
(1豪ドル=)	(円)	*	85.71 ~ 87.94	87.87	85.00 ~ 90.00

(データ) 先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 森田 大貴

(1) 今週の予想レンジ: 108.00 ~ 112.00 円

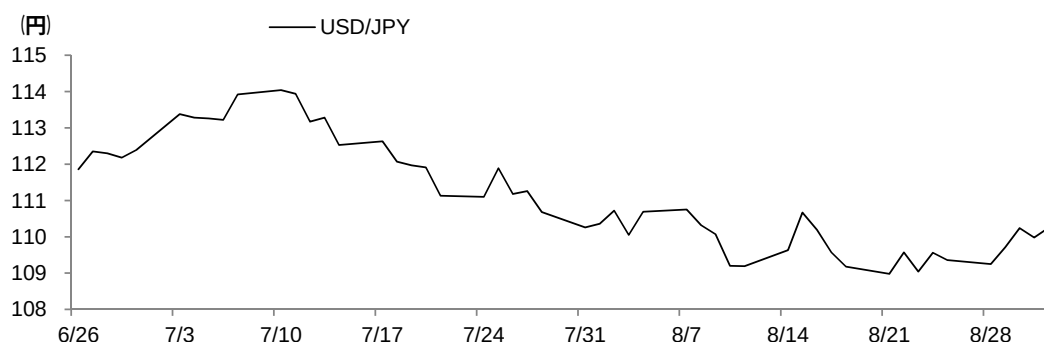
(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週のドル/円相場は週初下攻め後、週後半に反発する展開。週初8月28日に109円台前半でオープンしたドル/円は、週末の大型ハリケーン「ハービー」が米国経済に与える影響が懸念される中、じりじりと値を下げた。29日は北朝鮮がミサイルを発射し、日本上空を通過したというヘッドラインを受けて円買いの動きが強まると108円台前半まで急落。年初来安値には届かず、ショートカバーが意識されたことなどから一旦108円台後半まで戻したが、ユーロ/ドルが1.20を上抜け急伸する展開にドル/円は一時週安値となる 108.27円をつけた。もともと、その後は米8月消費者信頼感指数が予想を上回ったことなどが材料視される中、ドル買い戻しが優勢となり109円台後半まで上昇。30日は北朝鮮情勢に対する警戒感が後退した上、米8月ADP雇用統計が予想を上回り、米4~6月期 GDP(2次速報値)も1次速報値から上方修正されると110円台前半まで続伸。31日は日経平均株価の続伸に連れ週高値となる110.67円をつけた。だが、米経済指標の下振れや、ムニューシン米財務長官が「貿易の観点からドル安は米国にとって多少有益」と述べたことを受け、ドル/円は一時110円を割れる展開に。翌9月1日、米8月雇用統計は、非農業部門雇用者数、失業率、平均時給上昇率いずれも予想を下回ったことから米金利の低下とともに109.56円まで急落。しかし、対ユーロでドル買いが強まったことや、米8月ISM製造業景況指数が予想を上回ったことからショートカバーが強まり110.50円まで上昇後、110.24円で越週した。

今週のドル/円相場は揉み合いを予想する。先週は地政学リスクの高まりから円買いが強まる場面も見られたが、4月の年初来安値108.13円を前に反発し、テクニカルに見れば下攻めに失敗した格好となっている。需給環境を見ても、本邦実需勢や機関投資家による旺盛な押し目買い意欲が確認されており、年内レンジの下限ではドル/円を積極的にショートにしづらい状況が続いている。足許で米経済指標が総じて堅調であることや、9月のECB政策理事会やFOMCを控えていることなどから、米金利の低下基調にも一服感があり、グローバルに株価も底堅く推移している状況下、ドル/円は先週後半の流れを引き継ぎ買い戻しが入りやすい地合いではある。一方、9日(土)の建国記念日を前に、週末3日に北朝鮮は核実験を実施しており、地政学リスクが再度高まりを見せている。また、5日(火)に米議会が再開されるが、9月末が期限となる債務上限問題も意識されることに加え、米8月雇用統計も冴えない結果となったことに鑑みれば、ドル/円の上値は押さえられよう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/28~9/1)の値動き: 安値 108.27 円 高値 110.67 円 終値 110.24 円



(資料) ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 西谷 鷹

(1) 今週の予想レンジ: 1.1700 ~ 1.2100 129.00 ~ 133.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ/ドル相場は上下に激しい値動きとなった。週初8月28日に1.19台半ばでオープンしたユーロ/ドルは1.19台前半まで値を下げた。その後は前週末にドラギECB総裁がユーロ高を牽制しなかったことなどが意識される中、米金利が低下したことで1.19台後半まで反発。1.20を目前にして上値を重くしたが、29日はハリケーン「ハービー」の影響が懸念される中でドルが売られ、ユーロ/ドルは1.20を上抜けると一時週高値となる1.2070まで急伸し、2015年1月以来の高値をつけた。しかし、米8月消費者信頼感指数が予想を上回るとドル買い戻しの動きが強まり1.19台半ばまで軟化した。30日はドル買いの流れが継続し1.19台前半まで下落。さらに米8月ADP雇用統計や米4～6月期GDP(2次速報値)が予想を上回る結果を受けて、1.18台後半まで続落した。31日はECB内でユーロ高を懸念する声が増えているとの報道を受け、週安値となる1.1823まで売り進められた。しかしながら、ムニューシン米財務長官のドル安容認とも受け取れる発言を背景に1.19近辺まで反発。9月1日は米8月雇用統計が発表され、市場予想比弱い数字に一時1.19台後半まで上昇。しかし、直後に「ECBのテーパリングの計画は12月まで整わない可能性がある」とのヘッドラインが伝わると、ユーロ/ドルは1.18台半ばまで急落し、1.18台後半で越週した。

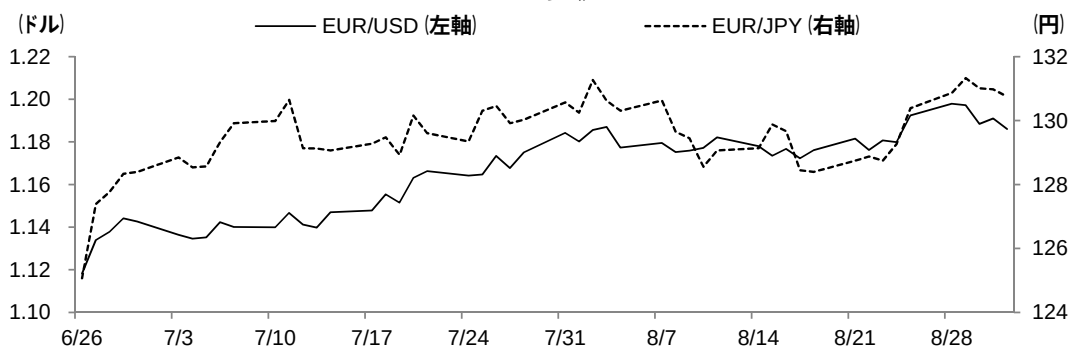
今週のユーロ相場は上下双方向の値動きに警戒して臨みたい。今週最大のイベントは7日(木)のECB政策理事会だろう。同会合の結果次第ではユーロが急騰または急落する可能性も十分考えられる。市場が最も注目している点は、今年12月で期限を迎える量的緩和(QE)の処遇についてである。大方の予想では今会合で具体的な決定が示される可能性は低く、スタッフに技術的な検討を指示した上で、結論は次回10月会合に持ち越しとの見方が大勢である。但し、来年以降、技術的にテーパリングが不可避であることが見透かされてしまっている状況下、結論の先送り=テーパリング期待後退に繋がるとは考えづらく、むしろ正常化への議論が進んだとの見方から一段とユーロ高が進むリスクの方が高いように感じる。また、3か月に1度アップデートされるスタッフ見通しにも注目。6月会合時点ではユーロ圏の成長率予想が上方修正された一方、インフレ予想は軒並み下方修正されており、今回発表される数字如何では今後の政策動向に影響を与える可能性がある。インフレ見通しが一段と下方修正された場合には、フォワードガイダンスを強調しつつも、テーパリングの旗は降ろさないといった難しい舵取りを迫られる可能性もあり、相場の反応は果たしてどうか。懸念すべき点としては、シントラ発言以降の急激なユーロ高を受けた牽制発言があるか否か。先月下旬のジャクソンホールではドラギ総裁からそのようなコメントは見られなかったが、直近一時1.20の大台をつけていることや、先週ECB関係筋より「ユーロ高を懸念する声が当局内で増えている」とのコメントが報じられたことなどを勘案すると、今会合でドラギ総裁からそうした発言があっても不思議ではない。いずれにせよECB政策理事会次第で相場が大きく振れる可能性が高く、上下双方向への激しい値動きに注意して臨みたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/28～9/1)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1823 高値 1.2070 終値 1.1860

(対円) 安値 129.66 高値 131.70 終値 130.84



(資料) ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2850 ~ 1.3100 141.00 ~ 144.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は月末フローや米ドルの動きに振られながらも行ってこいの展開となった。週明けはジャクソンホールからのドル売りの流れを受けてギャップオープンし1.29台でスタート。さらに29日には北朝鮮のミサイル発射によるドル円の下落を発端にドルが全面的に売られる展開となり、ポンド/ドルは1.2979をつけた。しかしその後ニューヨーク時間には米株が反転上昇する動きに一転ドル買いの動きとなりポンド/ドルも反落。30日に発表された米8月ADP雇用統計が予想対比良好な結果であったことからさらにドル買いが進行し一時1.2886をつけるも、ユーロ/ポンドのロングの手じまいなどを背景に1.29台を回復した。しかしその後もドル買いの流れに上値重く推移し、バルニエEU主席交渉官の「EU離脱交渉には十分な進捗がない」との発言もあり1.2853まで下落した。しかしその後、ムニューシン米財務長官の「一段と弱いドルは貿易面で米国の助けに」との発言によりドル売りの流れとなり1.29台を再び回復。9月1日に発表された米8月雇用統計が予想対比悪化したこともあり、今週の高値1.2995をつけた。同日発表された米8月ISM製造業景況指数は予想対比良好であったため、やや値を戻し1.29台半ばでの越週となった。先週は英国の指標や、第3回EU離脱交渉のヘッドラインがあったものの英ポンドへの影響は少なく、結局は月末フローや米ドルの動きに翻弄された一週間となった。

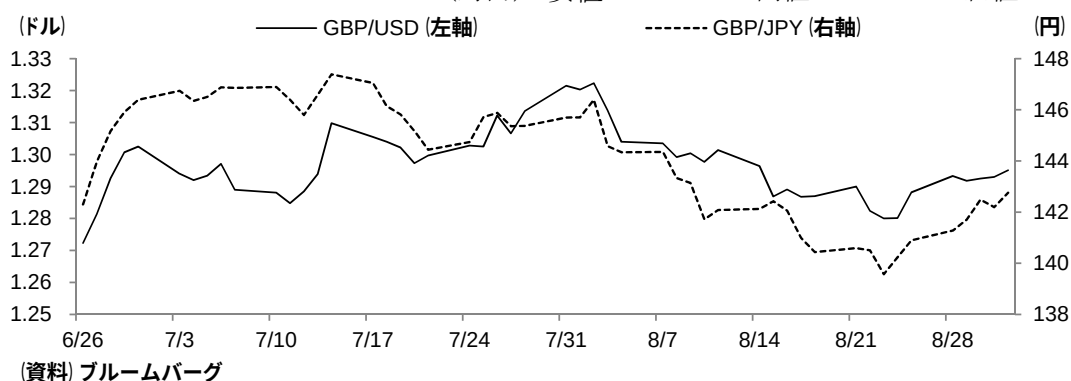
今週の英ポンド相場は、対ユーロ主導での堅調な推移を予想。31日に終えた英EU離脱交渉では、英国が英領北アイルランドとの間で検問を設けない方針を示した国境問題では有意義な議論があったとしたものの、全体としては決定的な進展が見られず、依然双方の主張に隔たりがあるため今後も交渉の難航が予想される。金融市場の注目は7日(木)のECB理事会だが、ドラギ総裁がテーパリング等踏み込んだ発言をしなければ、日足での一目の転換線を下抜けたユーロ/ポンドのさらなる調整を呼ぶと思われる。また、通貨オプション市場におけるポンド/ドルの1か月物リスクリバーサルがポンドコール方向に縮小していることから、ポンド下落への警戒感が薄れてきている模様だ。英経済指標は4日(月)の8月英国建設業PMI、5日(火)の8月英国サービス業PMI、8月英国コンポジットPMI、8日(金)の英7月鉱工業生産、英7月製造業生産などが予定されているが市場の関心が高いとは言えない。むしろ、5日(火)から再開される米連邦議会において9月末の期限に向けて政府部門の閉鎖懸念が強まることによる米ドル主導での上下動がリスクであろう。また、今週末の9日(土)は北朝鮮の建国記念日であり、その前後での地政学的リスクが市場の攪乱要因になると恐れられ、引き続き英国要因以外での動きに注視する必要があると思われる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/28~9/1)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2852 高値 1.2995 終値 1.2941

(対円) 安値 140.02 高値 143.01 終値 142.76



4. 豪ドル

(1) 今週の見通しレンジ: 0.7700 ~ 0.8100 85.00 ~ 90.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は、小幅レンジで推移。週初28日、豪ドルは対ドルで0.79台前半にてオープン。前週末のジャクソンホール経済シンポジウムでドラギECB総裁がユーロ高牽制発言に言及しなかったことに加え、ロンドン市場が休場であったことから週明けは小動きでの推移となり、豪ドルは0.79台半ばから後半で推移。しかし29日未明に「北朝鮮西岸から1発のミサイルが発射された」との報道に加え、日本の上空を横切り太平洋に落下したことが明らかになると、地政学リスクの高まりからリスク回避の動きが強まり、豪ドルは一時0.7906まで下落。その後は過度な円買い圧力が後退する中、株式市場も下げ幅を縮小させると、豪ドルも0.79台後半まで値を戻す展開。30日は豪7月建設許可件数が予想比良好な数値となり、一時0.7996まで上昇するが海外時間で米経済指標が好調結果を示すと、豪ドルは0.7900を割り込む。31日はドル買いの流れが継続し、一時週安値0.7872まで下落するが、米国のハリケーン「ハービー」が経済指標に与える影響を踏まえると年内利上げは難しいとの見方やムニューシン財務長官より「米国の貿易は弱いドルの方がやや好ましい」との発言がなされると、ドル売りの動きが急速に強まり、豪ドルは0.79台半ばまで上昇。9月1日は米8月雇用統計を前に様子見ムードが広まるが、発表された米8月雇用統計結果が弱い結果を示すと、豪ドルは週高値0.7997まで上昇し、0.79台後半で越週となった。一方対円は、北朝鮮のミサイル発射を受けて一時弱含む場面も見られたが、週後半にかけては堅調推移。週初28日は86円台半ばでオープン。その後はロンドン市場が休場となる中、86円台後半で小幅推移。しかし、29日未明にミサイル発射の報道がなされると、リスク回避の動きから円買いが進み、豪ドル/円は87円台前半から週安値85.71円台まで急落。その後はリスク回避の動きが後退させる中、ショートカバーの巻き戻しから87円台を回復。30日も過度なリスク回避ムードが後退する中で、豪ドル/円は87.79円まで上昇するが、その後は豪ドルが売られる展開から上げ幅を縮小。9月1日は弱い米8月雇用統計結果を受けてドル売りが強まり、週高値87.94円をつけた後、87円台後半で越週した。

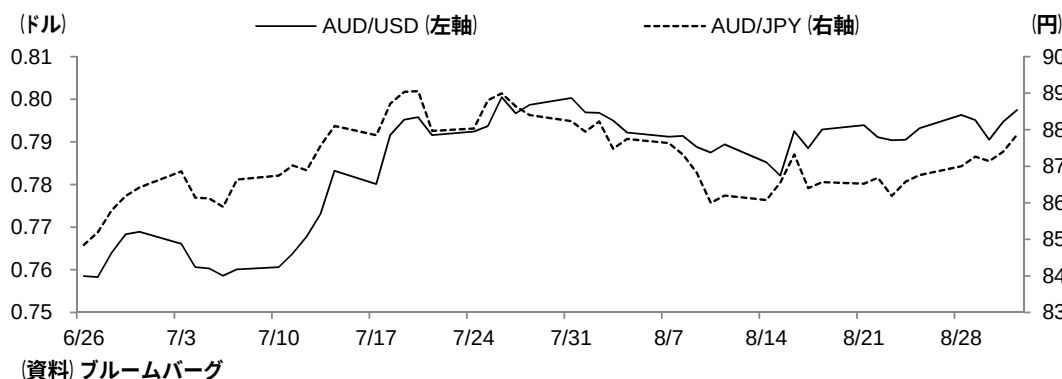
今週の豪ドル相場は、上値重い展開を予想する。前週末(3日)には北朝鮮が水爆の実験に成功したとの発表を行い、また規模についても過去6回のうち最大規模であったということもあり、週明けの為替市場はリスクオフムードが高まり、豪ドルは対ドル・対円で共にギャップダウンしてオープンしている。今回の核実験に対しては、各国で非難の声が高まっており、緊急会合の開催も予定されているが、市場の注目はトランプ大統領が軍事的な圧力を強めるかどうかにあるだろう。ただし、同氏は米国内で発生したハリケーン「ハービー」への対応や9月末に期限を迎える債務上限問題へ早急な対応が求められており、国際社会におけるプレゼンス向上よりも、目先の問題解決を優先する可能性が高く、リスクオフムードの高まりは収束の方向に向かうであろう。ただし、9月9日(土)には北朝鮮の建国記念日を迎えることから積極的にリスクテイクするような流れは予想しにくく、今週の豪ドル相場も上値重い展開となろう。一方、国内材料としては主要指標の発表が目白押しで、5日(火)には4~6月期経常収支と豪準備銀行(RBA)政策金利発表、6日(水)に4~6月期GDP、7日(木)に7月小売売上高、8日(金)に7月住宅ローン貸出が予定されており、こちらの結果にも注目が集まる。特に今回のRBA声明文においては、先月のRBA声明文ではそれほど強い牽制ではないものの、豪ドル高に対する懸念が示されたっており、足許の為替水準が年初来高値水準となる0.80台近辺に位置していることから、ハト派なスタンス動向には注意を払っておきたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/28~9/1)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7872 高値 0.7997 終値 0.7972

(対円) 安値 85.71 高値 87.94 終値 87.87



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。